

第2章 各セグメントの最近10年

I 運輸セグメント

関西国際空港第2滑走路の供用開始以降、空港線利用客は増加に向かった。さらにLCC（格安航空会社）が就航すると、ビザ発給要件の緩和や円安を追い風に外国人観光客が急増。観光・インバウンド対応が急がれた。南海本線、高野線においても駅施設の整備、新型車両の導入など、沿線価値の向上に取り組んだ。

1 鉄道事業

サービス

minapita、PiTaPa導入（H18）

スルッとKANSAIが提供するICカードシステム「PiTaPa」は、平成16年（2004）8月から京阪電気鉄道、阪急電鉄、能勢電鉄が先行して導入し、18年1月からはJR西日本の「ICOCA」とPiTaPaの相互利用サービスが開始され、2月からは大阪市交通局と阪神電気鉄道がPiTaPaを導入するなど、注目を浴びていた。

こうした各社の動きに対し、当社ではPiTaPa導入日を同年7月1日と決定。これに先立ち、なんばCITY・なんばパークスなどの当社施設、当社グループおよびその他の提携施設で利用できるギフト券などに交換でき

るポイントを付与する機能を搭載した新しい南海グループカード「minapita」のサービスを2月から開始した。鉄道でのPiTaPa利用を推進するとともに、沿線の価値を向上させる狙いがあった。



minapita (VISA/JCB) カード

そして、当初の予定どおり18年7月にPiTaPaを導入し、翌19年4月には「PiTaPa 定期サービス」を開始した。PiTaPaカードにIC定期券の機能を付加し、当社線のみでの単独定期券および泉北高速鉄道との連絡定期券として利用できるようになった。IC定期券サービスはこの後さらに拡充し、21年3月から阪神電気鉄道、26年3月からはJR西日本および近畿日本鉄道、27年3月からは京阪電気鉄道との連絡IC定期券の発売が



自動改札機にタッチして乗車



JR西日本と共同で連絡IC定期券をPR

開始された。

交通系ICカードシステムは、全国各地で導入され、またたく間に広がっていったが、システム互換性の問題から、利用はそれぞれの地域に限定されていた。そうしたデメリットを改善すべく、25年3月から、PiTaPaをはじめとした10種類の交通系ICカードによる全国相互利用サービスが開始された。交通系ICカードのいずれか1枚、つまりPiTaPaカード1枚あれば、北海道から九州まで全国の142事業者が運行する鉄道・バス（一部路線を除く）に乗車できるようになり、お客さまの利便性は大きく向上した。

さらに、27年1月には当社、泉北高速鉄道、大阪府交通局およびJR西日本が、お互いの鉄道利用の利便性を向上し、一層の利用拡大とともに図る目的から、ICOCAによるIC連携サービスを拡大することに合意。当社においては平成29年春からICOCAおよびICOCA定期券を発売する運びとなった。

このサービスは、スルッとKANSAI協議会とJR西日本による「ICカード乗車券を活用した連携サービス」に基づくもので、支払い方法など特徴の異なるPiTaPaとICOCAを、お客さまがニーズに応じて選択できるようになることから、交通系ICカードのさらなる利用促進につながる施策として期待されている。

駅にAED・筆談器設置 (H18～)

当社の主要事業である運輸事業では、お客さまに対する「安全・安心」の提供が第一の使命。ハード面でのバックアップ体制と高品質なサービス提供という、ハード・ソフト両面からの取組みが求められている。

「AED（自動体外式除



AED（自動体外式除細動器）

細動器）」は、心臓突然死に至る危険な状態（重症不整脈）から人命を救うため、電気ショックを与えて心臓本来のリズムを取り戻す装置。車内や駅構内におけるお客さまの不測の事態に備えて、平成18年（2006）6月から難波、新今宮、関西空港、堺東、高野山の5駅に、9月には天下茶屋と中百舌鳥の2駅にAEDを設置した。

また、7月には「筆談器」を駅長所在駅など37駅に設置。筆談器を使用することで、耳の不自由なお客さまとのスムーズなコミュニケーションが可能になり、健常なお客さまに対しても駅周辺の地理を図で示しながらご案内できるようになった。

AED、筆談器ともに適宜、設置駅を増やしている。



筆談器

観光・インバウンド対応

●多言語対応の案内拠点 総合インフォメーションセンターなんばがオープン (H21)

平成19年（2007）8月、関西国際空港第2滑走路の供用開始以降、発着便数も増え、ご利用になるお客さまはようやく増加傾向に向かった。早急な観光・インバウンド対応が求められるなか、21年4月25日、空港と直結する大阪ミナミの玄関口である難波駅1階に、大阪



総合インフォメーションセンター前でのテープカット

市初の官民共同インフォメーションセンター「総合インフォメーションセンターなんば」がオープンした。同センターでは、大阪市が運営する「大阪市ビジターズインフォメーションセンター・難波」と、当社が運営する「南海インフォメーションセンター」、南海国際旅行の「南海トラベルサロン」がカウンターを並べ、国内外のお客さまに、英語のほか、テレビ電話システムを利用して韓国語や中国語、さらには手話でも対応。詳細な情報提供と迅速かつきめ細やかな心配りができる案内拠点として、26年12月、日本政府観光局（JNTO）から、全国で18か所しかない最高レベルのカテゴリー3に認定された。

●「Peach・なんばきっぷ」など各種企画乗車券を発売（H23～）



共同記者会見に臨む亘社長

関西国際空港をご利用のお客さまに当社鉄道を選んでご利用いただくためには、沿線に観光地などを有する各鉄道事業者との連携が不可欠である。平成23年（2011）5月、当社は大阪市や京都市、阪急電鉄、関西国際空港、近畿運輸局と共同で記者会見を実施し、関西国際空港と京都・河原町などを地下鉄堺筋線経由で結ぶ企画乗車券「京都アクセスきっぷ」を発売することを発表した。会見で亘信二社長兼COOは「同きっぷの発売で、安い交通手段を使いたいと考える個人旅行客を取り込みたい」と意気込みを述べた。

こうした動きは翌24年から一気に加速。4月からは大阪市交通局と共同で「関空ちかトクきっぷ」を、近畿

日本鉄道と共同で「奈良アクセスきっぷ」をそれぞれ発売し、5月からは阪神電気鉄道と共同で「神戸アクセスきっぷ」の発売を開始。さらに12月からは、関西国際空港の施設使用料引き下げを受け、「関空トク割ラポートきっぷ」の発売を開始した。

これらと前後して、同年からはLCC（格安航空会社）とも連携。関西国際空港を拠点とするPeach Aviationが定期便の運航を開始するにあわせて、3月から同社と共同で「Peach・なんばきっぷ」のPeach便機内での販売を開始。また、12月からは第2弾として「Peach・京都観光きっぷ」の発売を開始した。

一方、25年4月からはジェットスターグループとも連携。共同で「ジェットスター・ナンカイきっぷ」の発売を開始した。

LCCの就航が相次ぎ活況を迎えた26年2月からは、海外向けに企画乗車券のネット販売も開始した。海外のお客さまが日本への旅行出発前にインターネットで乗車券や旅行商品などを購入できるシステムを開設。当社グローバルサイトなどからアクセスし、クレジット決済することで発行される引換証を、関西空港駅のツーリストサポートセンターで提示いただき乗車券と交換する仕組み。システム開設時点では関空トク割ラポートきっぷなど3種類を取り扱い、英語・韓国語の2言語に対応。その後、中国語（簡体字・繁体字）にも対応させるとともに、順次商品ラインナップの充実を図っている。

駅・特急の全面禁煙化を実施（H23）

受動喫煙防止に対する社会的要請が高まり、お客さまからも駅の全面禁煙を求めるとご意見・ご要望が増加してきたことから、平成23年（2011）4月から駅の全面禁煙化を実施。ホームの端に設けられていた喫煙コーナーも廃止して、灰皿を撤去した。実施にあたっては、1か月前から告知キャンペーンを行い、各駅の灰皿付近にご案内ポスターを掲示したほか、車内放送によ

て、お客さまに全面禁煙へのご理解・ご協力をお願いしました。さらに9月からは、特急「サザン」新型車両12000系の営業運転開始にあわせて、すべての特急車両の全面禁煙を実施。こうして、当社の鉄道事業を担う駅構内、ホーム、車両の完全禁煙化が実現した。



全面禁煙を告知するポスター

「赤いラピート」「ハッピーライナー」 「特別仕様こうや」を運行 (H26~27)

平成26年(2014)4月から6月にかけて、空港線開業20周年を記念して難波～関西空港駅間で「赤いラピート」を運行した。これは、人気アニメ「機動戦士ガンダム



赤い彗星の再来 特急ラピート ネオ・ジオンバージョン (©創通・サンライズ)

ユニコーン」のシリーズ作品「機動戦士ガンダムUC episode 7『虹の彼方に』』とタイアップしたもので、車両は「機動戦士ガンダムUC×特急ラピート 赤い彗星の再来 特急ラピート ネオ・ジオンバージョン」と名付けられた。

元来は深いブルー(ブルーマイカ)を基本色とした特急「ラピート」の車両外観を、映画の登場人物であるフル・フロントルが率いる組織「ネオ・ジオン」をイメージした赤色に変更するとともに、随所に機動戦士ガンダムユニコーンUCの世界観を表したデザインを施した。さらに車内には、映画の登場人物たちを想定した専用席(特別装

◆ NANKAI 130th Anniversary

10年
ひと昔

夢と理想の実現を チームでバックアップ

運輸部 営業課 齋藤 俊也

空港線開業および特急ラピート運行開始20周年という記念の年に「インパクトのある大きなことをしなければ」との強い思いがありました。

以前から温めていたアイデアをもとに、平成25年の5月ごろ計画を本格スタート。当初は初代ガンダムで構想を練っていましたが、著作権元に話を持っていったところ、新作映画の話が上がり、映画とタイアップする形で交渉を重ねました。

企画を進めるにあたって、主担当の大幡さん自身が熱心なガンダムファンということもあり、彼にはやりたいことをすべて盛り込むようお願いしました。問題の解決は周りの



当時担当した大幡齊さん(右)と

メンバーに任せておくと。その結果、随所に彼の細かいこだわりが散りばめられ、全国のファンのマニア心をくすぐったと思います。

運行開始後の反響は予想以上。駅での安全対策や、車内で特別席をご覧になるお客さまの対応などに腐心しましたが、沿線から子どもたちが手を振ってくれたり、農家の女性が畑から写真を撮ってくれたりするのを見て、南海ファンの裾野を広げられたことを実感し、うれしかったですね。



車両内装 (©創通・サンライズ)

飾席)を設置。スーパーシートをご利用のお客さまに自由に写真撮影などを楽しんでいただけるようにした。

新聞やテレビなどマスコミでも大きく取り上げられ、運行記念グッズは即日完売し、記念入場券も数日で完売。「ラピート」と「機動戦士ガンダム」、双方のファン根強い人気相乗効果呼び起こした、画期的な他社とのタイアップ企画となった。

「ラピート」の運行開始20周年を記念した企画は、装いを新たにしながら続いた。9月から1年間の予定で、難波～関西空港駅間を「出逢えたらラッキー Peach×ラピート ハッピーライナー」の運行を開始。幸運のシンボルである「桃」を社名の由来とするPeach Aviationとの共同企画で、ラピート1編成にPeachカラーのデザインを施し、デッキ付近にハートマークのステッカーを貼付。「出逢えたらラッキー」な列車とした。お客さまの遊び心を刺激しつつ、Peachのご利用をアピールする、斬新なアイデアとピンクのラピートが話題を集めた。



Peach×ラピート ハッピーライナー

一方、高野線においては27年、高野山開創1200年記念大法会が執り行われるのに伴い、高野山への旅客誘致と鉄道の利用促進を目的として、特別デザインを施した特急「こうや」の運行を3月1日から開始した。歴史的な記念の旅に祝祭感を添え、旅のムードを盛り上げる特別仕様とし、車両外装は日本古来の蒔絵に倣ったデザインで、地色の異なる3つのバリエーションを展開。それぞれ「赤こうや」「黒こうや」「紫こうや」と名付け、高野山の四季をテーマにした絵柄をあしらった。また、車内にもヘッドカバーや客室通路に特別デザインを施した。



特別仕様(3色)こうや

ダイヤ変更～特急網の整備拡充とお客さまの利便性向上への取組み(H17～26)

鉄道をコア事業とする当社にとって、列車運行ダイヤは「最大の商品」といえる。一人でも多くのお客さまに満足いただけるよう、利便性向上に取り組んだ10年の変遷を振り返ってみよう。

平成17年(2005)10月、特急網の整備拡充などお客さまの利便性向上を目的に、高野線のダイヤ変更を実施した。特急「こうや」「りんかん」の発着時刻を変更。難波～極楽橋駅間の急行は一部を除き難波～橋本駅間の運転とし、橋本～極楽橋駅間はワンマン運転にした。

また、同年11月には、泉佐野駅付近下り線の高架化にあわせて、南海線のダイヤを変更。関空アクセスの増強、特急網の整備拡充、乗り換えの利便性向上を目的に、空港線の運転本数を増やし、泉佐野駅ではスムーズな乗り換えが可能な「ホーム・ツー・ホーム乗り換えサービス」を開始。泉佐野～関西空港駅相互間では新たな特急料金(大人100円・小児50円)を設定した。

19年8月、特急の利便性向上などを目的として、南海線と高野線のダイヤを変更した。南海線では特急「サザン」を増発するとともに、速達性の向上などで尾崎駅以南のお客さまの利便に配慮。多奈川線・加太線では南海本線との接続を改善した。一方、高野線では、特急「りんかん」の利便性を高めるとともに、夕刻以降の三日市町駅以南への速達性を向上させ、橋本駅での乗り継ぎも改善した。

20年11月には高野線において、安全性の向上と列車遅延対策などを目的としたダイヤ変更を実施した。一部の駅で停車・運転時分を延長し、特急「こうや」「りんかん」を増発。夕方ラッシュ時の橋本方面への速達性を向上させた。

21年10月には、特急「サザン」「ラピート」の増発をは

じめとする特急網の整備拡充を中心に、南海線のダイヤを変更。同時に「サザン」は、すべての列車を一部座席指定とした。また、特急および急行の運転本数を増加し、難波～和歌山市駅間の利便性を向上させた。

24年4月、和歌山大学前駅の開業にあわせて、南海線のダイヤを変更した。自由席特急をすべて特急「サザン」とし、終日30分間隔での運転を実施。和歌山大学前駅には、急行、区間急行、普通が停車。和歌山港線は、南海フェリーとの接続に特化するダイヤ編成とした。



和歌山大学前駅にて行われた出発式

25年10月には、高野線のダイヤ変更を実施した。特急「りんかん」の発着時刻を変更し、夜間には下りを増発。橋本駅でのJR和歌山線などとの接続も改善した。また、行楽シーズンの需要に対応し、土・休日の「天空」を1往復増発して1日3往復とした。

26年10月、南海本線と空港線のダイヤを変更。空港線では、昼間の空港急行の増発や特急「ラピートβ」の一部a化によって所要時間を短縮したほか、関西国際空港における深夜便旅客の利便を図るため、関西空港駅発の最終列車後に普通列車を増発した。また、南海本線では特急「サザン」を終日と歌山大学前駅に停車させ、直結する商業施設などへのアクセスを向上させた。

車両・施設

人と環境により優しく「8000系」「8300系」がデビュー (H20~27)



デビューした8000系車両の外観

平成20年(2008)3月、「やさしい」が「うれしい」をコンセプトに設計した新型車両「8000系」の運行を開始した。同車両の特徴は、人と環境に優しい構造。着席位置を明確にしたバケット式クッションをはじめ、立ち上がり補助のための手すりなどを設置。低床面化によってホームとの段差を解消し、デザインや色分けによって優先座席・出入口を分かりやすくするなど、お客さま

の利便性向上に重点を置いた。また、軽量化や電力の効率的な利用による省エネ、ノンフロン冷房などによって、環境への負荷低減にも配慮した。

デビュー当初は4両2編成を南海線で普通車として運用。翌21年には、さらに8両を増備し、通勤車両として営業運転を開始した。お客さまにより快適な車両を提供するため、その後も増備が進められ、計52両となった。

また27年10月、南海線において新型通勤車両「8300系」20両を導入し、営業運転を開始した。8300系は既存車両のデザインを踏襲しながらも車両先頭部や内装などをリニューアル。車内外への騒音低減に優れ、省エネ効率が高い狭軌用全閉内扇型主電動機を日本で初めて本格採用するとともに、客室内および出入口ドア窓に複層ガラスを採用して保温・遮熱性を高め、すべての灯具にLEDを採用することで、消費電力を従来車両と比較して約50%低減した。さらに4か国語に対応した車内案内表示器を設置するなど、人と環境に優しい省エネ車両となった。

NANKAI 130th Anniversary



地域の皆さまとともに取り組んだ「こうや花鉄道プロジェクト」

高野山という目的地に加え、そこへ向かう道中として鉄道の魅力を作り出し、高野山旅行の楽しみや期待感を地域の皆さまとともに創出することを目的に、

平成19年(2007)に「こうや花鉄道プロジェクト」をスタートした。

対象エリアは橋本～高野山駅間。同年10月の下古沢駅の「花屏風」設置を皮切りに、九度山駅の「九度山真田花壇」、高野下駅の「花屏風」「南海思い出ミュージアム」、「中古沢橋梁展望

デッキ」の設置などを実施し、地元ボランティアらと協力しながら地域活性化・観光旅客誘致を図ってきた。

なかでも、21年7月に定期運行を開始した展望デッキ付列車「天空」は、同プロジェクトのシンボルとして全国に広く認知されるに至った。

25年3月からは、高野山ケーブルカーからの窓風景の魅力を向上させるため、イロハモミジ、シャクナゲ、アジサイなどをテーマ別に植樹した。高野山開創1200年を節目に、今後これら四季折々の花、色鮮やかな紅葉、豊かな新緑が育っていくことで、これまで以上に魅力的な観光スポットとなることが期待される。

高野下駅の花屏風づくり





笠木橋梁を走る天空

こうや花鉄道「天空」定期運行開始 (H21)

当社では、「進化123計画」のもと「沿線価値向上に資する施策の重点実施」を掲げ、平成19年度から高野線において、地域の皆さまとともに「こうや花鉄道プロジェクト」に取り組んでいる。平成21年(2009)7月、同プロジェクトのシンボルともいえる観光列車「天空」の定期運行を開始。森林の深いグリーンを基本色としたボディに高野山・根本大塔を想起させる朱色のラインを施した、優雅な車両の誕生によって、世界遺産・高野山を目指す旅の道中は、一層魅力的なものになった。

橋本駅から極楽橋駅までの19.8km、標高差443m間を運行する天空は、3枚続きのワイドな車窓から山間

の風景を一望できるワンビュー座席や、森林の澄んだ空気が吹き抜ける展望デッキなど、高野山麓の自然を五感で楽しめる構造。なかでも、高野下駅から極楽橋駅の区間は、50%の急勾配とトンネル、半径R=100の急カーブが連続し、山岳鉄道らしい旅の醍醐味が実感できると、好評を博している。

南海線に新型特急12000系 「サザン・プレミアム」運行開始 (H23)

平成23年(2011)9月、南海線において「サザン・プレミアム」が営業運転を開始した。「サザン・プレミアム」とは特急「サザン」新型車両12000系の愛称で、その名



ワンビュー座席



パソコン使用にも対応



新型特急「サザン」12000系

のとおり従来の10000系よりワンランク上の設備・利用価値を備えた車両としてデビューを飾った。

大手私鉄で初めてシャープの「プラズマクラスター技術」を搭載し、車内に浮遊するウイルスの作用を抑制するとともにカビ菌などを分解・除去。座席幅を25mm広げ、AC電源やパソコン使用に対応したテーブルを設置し、車内の快適性を向上した。車椅子対応トイレや扉開閉予告チャイムを設置するなどバリアフリー化を一層推進するとともに、無水小便器を導入するなど環境にも配慮した。

また、女性社員からの意見を生かして、着替えなどに使える多目的室を設け、プライバシーへの配慮を施した座席ヘッドレストを採用。さらには、迷惑行為防止のために防犯カメラを関西の私鉄で初めて設置した。営業運転に先駆け、報道関係者を対象とした内覧会でも注目を集め、女性に優しい車両として新聞やテレビで紹介された。

駅の改良工事とバリアフリー化(H17～)

沿線の各駅では、お客さまに高品質なサービスを提供すべく、アクセスの改善や安全性の向上を図る改良とバリアフリー化工事が進められている。この10年間の動きを見てみよう。

北野田駅では、平成17年(2005)9月から上り・下りホームのエレベーターと多機能トイレの供用を開始。18年9月から19年3月にかけては三日市町駅の改良工事が進み、2階改札口、多機能トイレ、エレベーター・エスカレーター各2基と上りホームに直結する1階改札口が完成。4月1日の新バスターミナルの供用開始と相まってお客さまの利便性向上が図られた。

箱作駅では、19年3月「上り駅舎」「多機能トイレ」の供用を開始。同駅の上下改札前と駅前交通広場がエレベーター付きの立体横断施設で接続され、アクセスの改善と安全性の向上が図られた。

20年2月には、住吉大社駅のバリアフリー化工事が完成。住吉大社駅の上り・下り両ホーム～コンコース階

(2基)と、コンコース階～1階(1基)のエレベーター3基の設置や、トイレの多機能化を完了させ、供用を開始。あわせて同駅に、階段の昇降時に身体移動がしやすく膝や腰の負担を軽減できる波形の手すり「クネット」を関西の鉄道駅では初めて設置した。

高野山駅と極楽橋駅では、20年3月、バリアフリー化工事に着手。多機能トイレや、極楽橋駅のスロープ、車椅子用階段昇降機など、順次供用を開始してきた。残された問題は、両駅を結ぶケーブルカーにあり、構造上、駅のホームは急な階段状となっているため、お客さまにとっては上り下りが大きな負担となっていた。これを解消すべく、21年3月、高野山駅のホームと改札階を結ぶケーブルカー駅では西日本初のエレベーターが完成し、供用を開始。世界遺産・高野山の玄関口にふさわしく、高齢者や車椅子のお客さまにもご利用いただきやすくなった。



高野山駅のエレベーター棟と連絡通路

23年3月には、JR西日本と連携した「橋本駅バリアフリー化整備事業」が完成。駅前広場と当社線ホーム、JR線ホームを結ぶ跨線橋を新設し、それぞれ1か所ずつエレベーターを設置。跨線橋上には新たに当社駅務室を設置し、幅広タイプを含む自動改札機や自動券売機を備えた橋上駅舎が誕生した。さらに駅前広場に面して多機能トイレと一般トイレ、スロープを新設。ホームにも多機能トイレを新設するなど、「こうや花鉄道」の玄関口にふさわしい“すべてのお客さまにやさしい駅”に生まれ変わった。



橋本駅ホームのエレベーター

このほかにも、南海線と高野線の各駅において順次、多機能トイレやエレベーターなど、バリアフリー施設の供用を開始している。

難波駅改良工事が完成 (H21)

南海ターミナルビル再生計画の一環である難波駅の改良工事は、大阪ミナミの玄関口でもある難波駅を国際ターミナルとしての品格と機能性を備えた駅に再生することを目的とし、平成19年(2007)10月から工事を開始した。



吹き抜け大空間が広がった大階段周辺

改良のポイントは3つ。(1) 駅のリニューアル、(2) 周辺施設との連携強化、(3) 構内店舗の充実。このうち(1)については、シンプルで分かりやすい機能的な駅空間を目指し、具体的には、窓口の集約、案内施設の充実、構内トイレのリニューアルが先行して進められた。

まず、20年2月に3階改札内東側のトイレ新設工事が完成し、供用を開始。「気持ち良く使いやすいトイレ」をコンセプトに「男性用無水小便器」や「トイレ節水型自動洗浄装置」を採用。女性に優しいトイレを目指し、シックで落ち着いた雰囲気の内装を施し、トイレ・手洗いスペースを通らずに利用できる「パウダースペース」「授乳室」を併設した。

21年2月には、2階中央改札口に新駅務室を設置し、「難波駅サービスセンター」としてオープン。分散していた乗車券売場を改札口中央部に集約するとともに、明るく入りやすいガラス張りのオープンカウンターを採用し、改札口付近にはお客さまにきめ細かいサービスを提供する案内係「トランスアテンダント」を新たに配置するなど、お客さまのさらなる利便性向上を図った。



難波駅サービスセンター

そして21年10月、2年間の工事を経て完成した難波駅は、(2)と(3)のポイントを満たす、賑わいのある駅空間に生まれ変わった。なんばCITYやなんばパークスとの接続向上の



トランスアテンダント

ため、難波駅2階中央改札口のエスカレーターを移設して新たな「人の流れ」を創出するなど、動線を整備。3階コンコースには、直接高島屋へのアクセスが可能となるエントランスを設置したほか、窓口の集約によって新たに生まれた空間を利用し、駅全体の構内店舗の面積を約1.5倍に増床。「スイーツ」を中心にテイクアウトの品ぞろえを充実させた店舗を配置したほか、駅ナカタイプの「ユニクロ」を誘致した。

さらに翌22年3月には、東西通路が完成し、南海ターミナルビルと日本橋方面の回遊性が高まった。

三国ヶ丘駅改良事業 (H25～26)



2階に移転した当社の改札

平成25年(2013)9月、三国ヶ丘駅を橋上駅舎化し、東西自由通路の供用を開始した。北口と西口のそれぞれにあった改札口と駅務室を2階へ移転して1か所に集約し、線路で分断されていた東西の歩行者動線を確保。さらに、既存の北口を「東口」に名称変更し、西口との位置関係を分かりやすく整理した。

これらは「三国ヶ丘駅改良事業」の一環として位置づけられ、東西自由通路のエレベーター、改札内と上りホームを結ぶエスカレーターの設置工事、駅構内のリニューアル工事を経て、26年4月に同駅屋上に展望デッキを備えた広場(「みくにん広場」※不動産セグメントP.74参照)が誕生。同年5月には、駅ナカ商業施設(「N.KLASS 三国ヶ丘」※流通セグメントP.83参照)がオープンした。

和歌山大学前駅開業 (H24)



出席者代表によるテープカット

平成24年(2012)4月1日、南海本線孝子～紀ノ川駅間のほぼ中間に「和歌山大学前駅」が開業した。同駅の新設にあたっては、和歌山大学の最寄り駅となり、周辺では大規模な住宅開発が行われていることから、和歌山県、和歌山市、周辺土地区画整理組合の3者による請願があった。当社では、これを受け、近畿運輸局から新駅設置に関する事業基本計画変更および鉄道施設変更の認可を得て、19年3月から建設を進めてきた。相対式プラットホームに駅舎が線路をまたぐ「橋上駅タイプ」で、東西を行き来できる自由通路も設置した。

駅名については、当社や関係3者、学識経験者などをつくる「新駅駅名検討委員会」によって一般公募され、寄せられた2,726件、357種類の名称のうち、同委員会が選考した3案について検討した結果、南海本線や沿線のイメージ向上が期待できることなどから、「和歌山大学前」に決定した。

高野山駅駅舎改修 (H26～27)

平成27年(2015)に執り行われる高野山開創1200年記念大法会にあわせて、26年7月から高野山駅駅舎の改修を実施するとともに、8月からは極楽橋駅の美装化工事に着手した。

高野山駅では、構造用合板による耐震補強を施し、昭和5年の開業以来使われてきた国の登録文化財である駅舎の外観を、可能な限り開業当時の意匠に復元。また、乗車券の販売窓口をオープンカウンター形式に改装し、バスの案内カウンターも整備。2階は展示スペースとして整備する一方、トイレやエレベーターを新設し、休憩スペースとしてもご利用いただけるようにした。

NANKAI 130th Anniversary

10年
ひと昔

お客さまに、ひとクラス上の 快適な移動空間を提供するために

資材部(当時・車両部 車両課) 山田 健太郎

12000系の導入にあたっては、快適性と利便性の追求を重視しました。女性に優しい特急を目指して、特急の車掌をはじめとする女性従業員160人を対象としたアンケートの実施も行いました。その結果、授乳やお子さまがぐずったときにご利用いただける「多目的室」や、プライベート空間の確保を重視した座席、空気清浄機やデッキ部の防犯カメラなどが採用されています。当時、1座席に1個のAC電源の設置は、新幹線を含む特急車両でも珍しく、ビジネスユースへの対応としても先進的だったと思います。

設計過程では、デザインで目を引く大きな「標識灯(先頭車両の下側にある表示灯)」で苦労したのを覚えています。



12000系「サザン・プレミアム」を背に思い出を語る

す。標識灯全体が光るように見せるためにLEDを多く使用するの簡単ですが、これではコスト増となり、省エネにも反します。メーカーとも協議し、試行錯誤しながら、ガラスとLEDの間に「拡散板」を挿入し角度を工夫することで、限られたLEDでも全体が光るように見せています。走っている姿を見ると、わが子を見るような感覚になります。

極楽橋駅においては、ケーブルカーの乗り換えルートにあたるコンコースおよび連絡通路の壁面・天井を塗装。ホームからコンコース、連絡通路にかけて、行燈型あんどんの照明器具を設置した。

こうして、高野山の玄関口ともいえる2駅は美しく生まれ変わり、国内外から参拝や観光に訪れる多くのお客さまをお迎えする準備が整えられた。



リニューアルした高野山駅外観

プロジェクト工事

連続立体交差事業(連立事業)の進捗状況(H17~)



泉佐野駅の高架ホーム

平成17年(2005)11月27日、泉佐野市内連続立体交差事業と空港線建設事業の下り高架線の供用が開始された。昭和62年(1987)3月に都市計画決定されてから、実に18年半もの長きにわたり進められてきた事業であったが、当社の連続立体交差事業は、大阪

市内、堺市内(第1期)、岸和田市内、泉佐野市内で完成を見ることとなった。

残るは高石市内と泉大津市内、2事業の工事を推進していたところ、第2期となる堺市内連続立体交差事業が計画された。同事業は、諏訪ノ森駅と浜寺公園駅を含む石津川~羽衣駅間(約2.7km)の高架化などを推進するもので、7か所の踏切を除去し、交通渋滞の解消や踏切事故の防止などを図ることができる。事業主体である堺市が、平成18年11月7日付で大阪府から都市計画事業認可を取得。平成19年度以降、堺市では仮線用地買収などの業務を継続し、当社においては高架駅など鉄道施設の設計と準備業務を進めている。

泉大津市内連続立体交差事業では、20年6月7日に上り線の供用を開始。上り線切り替えによって、周辺の踏切遮断時間が短縮し交通渋滞が緩和された。また、泉大津、松ノ浜の両駅では、上り線側でバリアフリー対応の新駅舎での営業を開始した。そして24年8月4日、待ちに待った同事業の下り線高架化工事が完成し、始発から高架上での運行を開始した。上下線での高架供用開始によって、8か所の踏切が除去された。なお、これに伴い高架駅となった松ノ浜駅の中心位置が和歌山市方面へ約86m移動したことから、一部区間の運賃を変更した。

一方、高石市内連続立体交差事業では、高架化工事の進展に伴い、23年5月20日の夜間に羽衣駅と高石駅付近の下り線を仮線に切り替え、翌日から両駅で



出発式で紅白のテープにはさみを入れる関係者

下り仮ホームの使用を開始。この切り替えに伴って、14か所の踏切の遮断位置を変更した。同事業では、引き続き下り線の高架本体工事が進められている。

環境に優しい駅へ…

太陽光発電システムを設置 (H20~23)

連立事業に伴う駅の高架化は、ご利用のお客さまに当社の省エネルギーおよび環境保全への取り組みをアピールする好機でもあった。

平成20年(2008)には、泉佐野駅東側壁面に太陽光発電システムを設置し、3月から運用を開始。約1.4×0.8mの太陽光パネルを54枚使用し、最大10kWを発電し、駅構内の空調装置をはじめ施設の電源の一部

として活用する一方、改札付近に表示装置を設置し、太陽光発電による「現在の発電電力」「本日の発電電力量」「本日のCO₂削減量」を表示している。続いて23年1月には、高架化した泉大津駅にも太陽光発電システムを設置、稼働を開始した。下り線の屋根と天窓に設置した計420枚の太陽光パネルで発電する年間約7万1,000kWhの電力を、エレベーターやエスカレーター、空調機などに活用することで、年間約25.5tのCO₂が削減できる。

泉大津駅は、太陽光発電のみならず雨水利用システムや自己発電機能付き節水型自動水栓、節水型トイレ、無水小便器などの節水設備も導入。当社を代表する環境保全モデル駅として、環境負荷の低減を目指している。



太陽光発電パネルが並ぶ泉大津駅

バス事業の概況

バス事業においては、南海バスをはじめとするグループ会社が、公共交通機関としての使命を果たしながら、機動的かつ効率的な事業運営で収益力を高め、時代と地域の状況に、より一層きめ細かく対応する事業展開が進められている。

地域のニーズにお応えして

路線バスやコミュニティバスの使命は、地域のニーズに根ざした路線を設定し、広範なバスネットワークを構築することにある。「南海りんかんバス」では、平成18年(2006)2月、橋本市民病院循環バスの運行を開始。「南海バス」では、22年1月に新路線「堺匠町線」「住之江匠町線」を運行する一方、23年7月から河内長野市荘園町地区で「フリー乗降制度」を導入した。また「和歌山バス」では、24年4月和歌山大学前駅の開業にあわせて駅前から近畿大学附属校方面やりんくうタウンなどに発着する路線を新設した。

24年10月28日の関西国際空港LCC専用ターミナルの開業にあわせて、「南海バス」はエアロプラザと同ビルを結ぶ無料連絡バスの運行を開始。LCCをご利用のお客さまをはじめ、同ビル内の従業員の皆さまにも便利な輸送体制を確立した。

「和歌山バス」では、25年9月から和歌山大学と共



第2ターミナルビルに運行する無料連絡バス

同で社会実験も実施。この実験では、和歌山大学前駅と同大学を結ぶ路線バスにおいて、運賃が100円の「ワンコインバス」を運行し、学生のバス通学を促すことで交通事故防止や環境負荷軽減、駅周辺の混雑緩和への寄与を目指した。



ワンコインバスの運行について正式合意した井上和歌山バス社長(左)と山本和歌山大学学長

また同社では、和歌山大学前駅とふじと台を循環するコミュニティバス「ふじと台バス」の運行を開始。民間企業からの受託運行は初めての試みだったが、26年3月には同駅近くに大型商業施設が開業し、利便性の向上だけでなく、周辺環境対策としても寄与している。

なお、「南海バス」では、26年4月1日からIC決済サービス「PiTaPa」を導入し、阪堺電車と南海バスとの乗継割引制度を新設。27年4月には関西空港島内を除く全線に導入し、お客さまの利便性をさらに向上させている。

より安全で快適な高速バスの旅を

ビジネスや観光、帰省など、様々な目的にご利用いただいている高速バス事業では、なんばや和歌山などと全国各地を結ぶ新路線を開設し、新たなニーズの発掘に努めた。

「南海バス」では、低料金が歓迎され夜行高速バスが人気を集めるなか、平成18年(2006)3月「大阪・京都～藤沢・鎌倉線」、20年4月には「大阪・京都～柏崎・長岡線」の新規運行を開始した。その後「小田原・

藤沢・鎌倉行」については、お客さまからのご要望を受けとめ、24年7月から大阪駅前にも停車するようルートを変更した。



大阪駅前に停車中の夜行高速バス

また、「和歌山バス」では同年7月、夜行高速バスの「和歌山～千葉線」において新型車両「サウスウェーブ・アゼリア」を導入。主な利用者である女性のお客さまに、より一層快適な車内空間を提供するため、座席の一部に「プレミアムシート」を設けるなど車内設備をグレードアップした。

当社グループの高速バス事業は、快適な車内環境と、熟練運転士によって、お客さまを目的地まで安全にお送りしている。



「サウスウェーブ・アゼリア」見学会のフォトセッション

空港アクセスの改善とエリア拡大

関西国際空港を発着するリムジンバスは、平成27年(2015)6月現在で、京阪神を中心に四国や岡山など計25路線。「関西空港交通」を中心に、「南海バス」

「和歌山バス」「徳島バス」など計16社で共同運行している。

24年3月にPeach Aviationが就航して以来、関西国際空港では早朝や深夜に発着する航空機が増え、これに対応するべくリムジンバスの運行時間帯を順次拡大。27年7月からは、大阪駅前行きを24時間運行とし、なんば行きについても最終電車の後、第1ターミナル0時30分発の運行を開始した。

24年10月に第2ターミナルが開業すると主要路線を同ターミナルまで延伸。また、急増するインバウンドに対応するため、26年12月から第1ターミナルビル内に案内カウンターを設置したほか、バスの発車案内モニターも4か国語対応とした。

27年4月には京都線を増便するとともに、一部、市街地の中心部まで延伸し、外国人旅客が乗り換えなしで宿泊先などの目的地まで直接行けるように改善を図った。



和のテイストを醸し出した関西空港交通のリムジンバス「JAPANESE CABIN」

阪堺電気軌道の概況

阪堺電気軌道では、阪堺線(恵美須町～浜寺駅前)と上町線(天王寺駅前～住吉公園)の2路線を運行してきた。このうち、とりわけ堺市内の区間にあっては、利用者の減少などによって路線存続が危ぶまれてきた。市民と自治体を巻き込んでの論争が繰り広げられたが、それはかえって環境に優しい街づくりと都市交通のあり方を見直す好機ともなった。

LRT計画の中止と経営支援



存続に向けて動き出した阪堺線(堺市内区間)

平成19年(2007)6月、当社と「阪堺電気軌道」が堺市東西鉄軌道(LRT)の経営予定者に決定し、LRT早期開業区間である堺東～堺駅間と阪堺線(堺市内)の直通運転および一体経営を行う共同事業計画案が採用された。これによって、市中心部における公共交通の利便性は向上し、沿線地域の活性化に貢献できるものと期待されていたが、21年秋の市長選の結果を受け22年2月に正式に撤回されることとなった。しかし、その後も軌道線の運営については堺市との協議を続け、同年10月、10年間で総額50億円の経営支援と阪堺線の存続に向けた基本合意を締結した。

利用者拡大に取り組み、開通100周年へ

「阪堺電気軌道」では、すでに平成20年(2008)7月から通勤定期券の一部運賃を最大26.5%値下げし、長距離区間の利用促進を図っていたが、堺市の支援を受けて、さらなる利用拡大に向け様々な取り組みを開始した。23年1月からは、「幸せを招く縁起物」福助人形を展示した「福助電車」3両の運行を開始。「阪堺に乗って、福をもらって」と呼びかけた。また、堺市内と大阪市内の連続乗車の運賃を200円均一(小児100円)とし、堺市在住65



福助電車の人形

歳以上のお客さまに限り特定日の利用運賃を100円とした。さらに3月からは阪堺線と南海バスが1日乗り放題となる「堺おもてなしチケット」(大人480円・小児240円)の発売を開始。観光客への利用促進を図った。

そして、阪堺線の開通100周年にあたる同年12月1日、恵美須町で「明治・大正ロマンからnext 100年へ」と題したセレモニーを開催。翌24年4月1日には、浜寺駅前で「阪堺線全線開通100周年記念セレモニー」を実施し、次の100年もお客さまに愛される軌道となることを誓った。



恵美須町停留場での開通100周年セレモニー

「ウツラム紀州号」と「堺トラム」の運行開始

運賃均一化や沿線の商業施設開業によって利用者が予想を上回る増加を示したことから、平成25年(2013)2月、定時通行の維持を目的としたダイヤ改正を全線で実施。他社線との接続を改善するなど利便性を向上させ、大阪市内・堺市内相互区間の直通運転を天王寺駅前～浜寺駅間に統一するなど、お客さまのご利用状況・ご要望を反映させた。

また、同年4月には、貸切電車「ウツラム紀州号」がデビュー。現役最古の車両「モ161形車」と標準車両「モ701形車」を活用し、ヘッドマークや車内で使うテーブル、バーカウンターなどには紀州産木材を使用。木の香り漂うレトロな貸切宴会電車として人気を集めている。



紀州産木材で装飾された「ワットラム紀州号」車内

8月から、関西初となる低床式車両「堺トラム」の運行を開始。第1編成は「茶^{ちや}」。世界文化遺産登録を目指す百舌鳥古墳群や、千利休が追求した「わび」をイメージとし、「茶」にちなんだ呼称とした。続いて導入した第2編成は「紫^しおん」。紫は堺市出身の与謝野晶子が好んだ色で、かつ堺市の市花であるハナショウブを表現している。第3編成は「青^{せい}らん」。青は浜寺の海や日本の伝統色である「青藍^{せいらん}」が堺市の市旗の色に近く、「らん」という言葉が「走る」「藍」といった様々な意味を持っていて堺トラムのイメージに合致することから命名された。

また、同社では26年4月から、全線でIC決済サービス「PiTaPa」を導入。全国の交通系ICカードが利用可能になっただけでなく、多彩な割引サービスや南海バスとの乗継割引制度を実施している。

さらに、26年12月には「南霞町」を「新今宮駅前」に名称変更、27年2月には東湊～石津間に「石津北停留場」を新設し、お客さまの利便性をさらに向上させた。



「堺トラム」運行開始を記念してテープカット

海運その他運輸事業の概況

「南海フェリー」では、より多くのお客さまにご利用いただくために、工夫を凝らしたイベントやキャンペーンを開催するかたわら、施設や船舶のリニューアルを実施した。

平成20年(2008)4月には、さびや汚れが目立っていた和歌山・徳島両港のターミナル施設と案内サイン看板の改修工事を実施した。

25年6月には、「フェリーつるぎ」と「フェリーかつらぎ」の外観・内装をリニューアル。「つるぎ」はグリーン、「かつらぎ」はオレンジを基調にしたカラーの外装とし、個性を持たせた。内装では、船内客室を椅子席に模様替えしたほか、間仕切り付きの机が備えられたビジネスコーナーも新設。グリーン席にリクライニングシートを採用し、ソファ席もリニューアルした。さらに屋外では上階の一部を展望デッキとして開放。海と空の眺望を存分にお楽しみいただけるようにした。



船内客室に新設された椅子席

また、「熊野交通」の運航する「瀨峡ウォータージェット船」は、23年9月の台風12号の影響で乗船場などが甚大な被害を受け運休となったが、12月21日から営業運航を再開。瀨八丁とも呼ばれる31kmの大湫谷を抜け、断崖奇岩の絶景に間近でふれる船旅を再びお楽しみいただけるようになった。前日の20日には、志古船舶営業所で「運航再開記念式典」を実施した。



くす玉開花セレモニー

Ⅱ 不動産セグメント

「なんばターミナル再生計画」は順調に進み、「なんばエリア」の価値向上に向けた取組みは、集大成となる「南海会館ビル」の建替計画を残すのみとなった。不動産販売では、既存の住宅販売事業の推進に加えて分譲マンション事業に力を注ぎ、沿線のみならず神戸や東京など他地域にも業容を拡大した。

不動産賃貸事業

南海ターミナルビルなどの再生計画

(H19～22)

平成19年(2007)5月、難波駅を中心に、南海ビルや南海会館ビル、なんばCITY、スイスホテル南海大阪などで構成される「南海ターミナルビル」を含む「なんばターミナル再生計画」を発表した。同計画は、(1)南海ビル美装化改修工事、(2)ウェルカムロビー(仮称)新設工事、(3)高島屋大阪店新本館計画関連改修工事、(4)南海会館ビルおよびホテル南海なんば再生計画からなり、(1)～(3)の工事が先行して実施された。

●南海ビル美装化計画(H21)



文字やビジュアルが美しく浮かび上がる

南海ビル美装化計画では、「伝統と先進」を基本的な考え方とし、竣工当時の装飾物の復活や外壁の美装化などで、現在の風格ある建物外壁デザインを保存・再生し、良好な都市景観を形成することを目指し、1階および地下1階の公共部分の美装化改修工事もあわせて実施することとした。

工事は順調に進み、21年2月、外壁の大型駅サインボードが一新された。新サインボードは壁面と統一感を持たせた「ガラススクリーン」に収められ、(1)駅名の「南海なんば駅」を内照式立体文字で、(2)所要時間などの「アクセス情報」を白色LEDによる英語・中国語・韓国語の3か国語で、(3)「美しい景観を背景にした主な行き先(日本語)」を内照式看板でそれぞれ表示した。

●「なんばガレリア」が誕生(H21)

ウェルカムロビー(仮称)新設工事の目的は、なんばCITYの「ロケット広場」周辺を整備し、関西国際空港と直結する大阪の玄関口にふさわしい空間を創出することにあった。それに伴い、なんばCITY開業以来29年間にわたり親しまれてきた「ロケット」を撤去することとなった。平成19年(2007)8月23日深夜から24日の早朝にかけ、高さ33m、重さ18tのステンレス製ロケットが6分割され、南海ビルの屋上に設置した大型クレーン2台で先端部分から撤去された。



撤去作業の様子



セレモニーで華々しくオープン

ロケット撤去後の空間は暫定的に「ウェルカムロビー（仮称）」としていたが、名称を「なんばガレリア」と決定し、21年10月にオープンした。「ガレリア」とはイタリア語で「高い位置にガラスなどの屋根を持つ歩行者空間」を意味し、地下1階から8階までの高さ30m、広さ1,200m²の「室内吹抜空間」全体の呼称となり、地下1階の旧ロケット広場については「ガレリアコート」と名付けた。

なんばガレリアはミナミ・なんばの新名所として、(1) 世界へ開かれた玄関口にふさわしい観光旅行支援拠点、(2) 街歩き・街遊びの起点・終点、(3) 多彩な都市機能が複合した個性とにぎわいにあふれる広場空間と

しての役割を担うことになった。

●高島屋大阪店新本館計画関連改修工事 (H19~22)

高島屋大阪店の新本館計画に対応して、南海ターミナルビル内の歩行者通路の整備や、耐震性能や防災性能向上に向けた改修工事があわせて実施された。平成21年(2009)10月、難波駅3階コンコースから直接高島屋にアクセスできるエントランスが完成。翌22年3月には、高島屋と共同で整備を進めてきた東西通路が完成した。

なんばCITY本館1階および高島屋大阪店新館1階に長さ84m・幅5mの通路が整備され、同ビル内における東西の動線はスムーズになり、道具屋筋や日本橋方面への回遊性が高まった。



東西通路で動線がスムーズに

◆ NANKAI 130th Anniversary



文化財登録された南海ビル



南海ビルが国の登録有形文化財に

平成23年(2011)1月26日、南海ビルが国の登録有形文化財として登録された。

当社が所有する登録有形文化財としては、10年に登録された浜寺公園駅駅舎(明治の大建築家・辰野金吾が設計)と諏訪ノ森駅西駅舎、17年に登録された高野山駅駅舎があり、南海ビルは4件目になる。

南海ビルは、東武鉄道浅草駅を手掛けた久野節建築事務所くのみさおの設計による

もので、当社のシンボリックな拠点ターミナルビルとして、昭和7年(1932)7月に竣工。平成21年9月には、昭和55年に外壁を化粧直して以来の美装改修工事を完成し、「伝統と先進」を基本コンセプトとした保存・再生を実現したばかりだった。

このたびの有形文化財登録にあたっては、乳白色のテラコッタタイルを使ったコリント式の壁付円柱やアーチが連続する外壁に飾り壺などの装飾を配した、格調高いデザインが評価された。

大大阪時代より受け継がれた伝統の建造物は、先進の技術を取り入れながら、人々の記憶とともに次代へと受け継がれてゆく。

「フレイザーレジデンス南海大阪」開業

(H22)

「泊まる」から「住まう」へ。サービスアパートメント「フレイザーレジデンス南海大阪」が平成22年（2010）10月開業した。

平成18年（2004）12月をもって営業を休止したホテル南海なんばの跡地については、様々な有効活用策が検討された。その結果、駅前という恵まれた立地を最大限に生かしつつ難波の街づくりにも貢献できる、大阪初の国際レベル「サービスアパートメント」の建設を決定した。サービスアパートメント（SA）とは、ホテル水準のサービスが提供されるとともに、家具や電化製品、備品が設置されているアパートメントである。中長期滞在に対応することを基本に、ホテルのようなホスピタリティを備えながら、自宅同様のくつろぎを提供する宿泊施設の利用は、海外ではすっかり定着した旅行スタイルでもある。



フレイザーレジデンス南海大阪



自宅にいるようにくつろげる客室

当社では建設の決定に伴い、シンガポールに本社を持つフレイザーズホスピタリティ社への運営委託を決定。アジア地域をはじめ世界で30施設以上のSA運営で実績のある同社の高いブランドイメージと送客ネットワークに期待し、名称も「フレイザーレジデンス南海大阪」とした。国際級シティホテルのツインルームやスイートルームに相当するゆったりした広さを確保した114室をご用意し、宿泊人数や滞在期間など様々なニーズにも対応。

世界や日本各地から難波にビジネスや観光のお客さまをお迎えし、なんばエリアの価値向上に貢献している。

「みくにん広場」が誕生 (H26)

平成26年（2014）4月、「三国ヶ丘駅改良事業」の一環として同駅屋上に建設が進められていた屋上広場「みくにん広場」が完成。同時期にリニューアルされた駅ナカ商業施設「N.KLASS 三国ヶ丘」の先行オープンにあわせて開放された。

広場の名称「みくにん」は、「仁徳天皇陵古墳の最寄り駅である三国ヶ丘駅の屋上広場にふさわしい名称」というテーマで一般公募を行い、691件もの



井上不動産営業本部長と提案した児童

応募の中から堺市立榎小学校の児童の提案を採用。「三国ヶ丘」の「みく」と広場から眺望できる「仁徳天皇陵古墳」の「にん」をかけ合わせ、「みく」＝「未来」にわたってお客さまに親しまれる広場になってほしいとの思いが込められている。

広場には展望デッキもあり、仁徳天皇陵古墳や高野線・JR 阪和線のトレインビュースポットとして、市民の憩いの場所となっている。



みくにん広場でパンジーの花植え

南海会館ビル建替計画 (H24～)

平成24年(2012)2月16日、当社は南海会館ビル建替計画を発表した。平成18年に着手した南海ビルの耐震化・美装化工事、23年4月に完了したなんばCITYのリニューアル工事など「南海ターミナルビル再生計画」の集大成にあたる。

新南海会館ビル(仮称)は、地上30階、地下2階、高さ148mの超高層複合ビルで、延べ床面積は8万4,000m²。なんばエリアにおける業務機能の強化を図るべく、特級クラスの構造体耐震性能に加え、災害時などの館内滞留にも備えた国内屈指のBCP機能を確保したオフィスのほか、低層部には商業施設、金融サービス施設、先進・予防医療施設と都市型コンベンションセンターを配置する。

26年9月から旧南海会館ビルの解体工事に着手し、27年9月から新築工事に着工。中期経営計画「深展133計画」の基本方針として掲げられている「なんばエリアの求心力向上」を目指し、基幹プロジェクトとして推進している。竣工は30年9月予定。



全景イメージ

不動産販売事業

住宅開発事業

●着々と街づくりが進む「彩の台」(H17～27)

平成17年(2005)4月、当社が住宅開発した「南海林間田園都市・彩の台」に幼稚園・保育園が一体化した施設「ムーミン谷こども園」が開園。さらに、多彩な店舗が集積したショッピングセンター「オー・ストリート橋本彩の台」がグランドオープンするなど、緑に囲まれた街の中心部に生活基盤が整備され、残された地区の開発工事に拍車がかかった。

20年1月には、近隣エリアに新築一戸建13邸を竣工し、「ママ&キッズ・プロジェクト」として分譲を開始。子供たちがのびのびと遊べる広い庭など“ママとキッズにうれしい”設計で人気を集めた。

翌21年1月には、彩の台のなかでもバリアフリー設計に適したフラットな街区「サウスヒルズ」が街びらき。無条件宅地13区画、新築一戸建17邸の分譲を開始した。

さらに、25年には新街区「シーズンテラス」が竣工するとともに小学校が開校するなど、着々と街づくりが進んでいる。



街びらき当時のシーズンテラス

●「つばさが丘」に新街区「イーストガーデン」「グランビューテラス」が街びらき(H20～22)

「南海くまとり・つばさが丘」では、平成20年(2008)2



つばさが丘の街並み

月に新街区「イーストガーデン」を街びらきした。分譲にあたり無条件宅地22区画は、公園や緑道に隣接した区画や、ボックスガレージ付区画、110坪を超える大型区画など、多彩なラインナップをご用意。個性豊かな新築一戸建8邸の分譲も好評を博した。22年8月には、とりわけ眺望に優れ、平均敷地面積が120坪を超える新街区「グランビューテラス」が街びらきし、分譲を開始した。

分譲マンション事業

●「ザ・なんばタワー レジデンス・イン・なんばパークス」竣工(H19)



「ザ・なんばタワー レジデンス・イン・なんばパークス」

平成19年(2007)9月、「なんばパークス」の隣接地に超高層タワー型マンション「ザ・なんばタワー レジデンス・イン・なんばパークス」(戸数344戸・地上46階建)が竣工した。

同マンションは、当社とオリックス・リアルエステート株式会社など4社が共同開発した大型物件で、なんばパークス第2期事業と一体的に開発工事を進めてきた。緑豊かな大型商業施設なんばパークスとデッキで直結し、「なんばパークスに住む」というステイタスが実感できる居住空間の誕生は、大阪ミナミに新しい風を呼び起こした。

●「堺東ヴェーモ」「神戸三宮ブリーズレジデンス」の分譲、「ヴェリテ」シリーズの展開(H22～27)

当社グループの分譲マンション事業は、南海線・高野線沿線を基本としつつ、他社との共同開発にも積極的に取り組み、沿線外にも業容を拡大している。

平成21年(2009)12月には、当社が藤和不動産株式会社(現・三菱地所レジデンス株式会社)など4社と共同で開発した分譲マンション「堺東ヴェーモ」が竣工し、分譲を開始した。「堺東駅直結」「高島屋直通」という利便性の高さで人気を集めた。

24年4月からは、オリックス不動産株式会社と共同で「神戸三宮ブリーズレジデンス」の分譲を開始。阪神・三宮駅から徒歩7分という好立地に、地上15階建て、総戸数56戸(全戸南西向き)のマンションを新築・分譲し、当社初となる神戸市内での分譲マンション事業となった。

また、当社グループでは「本当に価値ある住まいをお届けしたい」という思いを込めたマンションブランド「ヴェリテ」シリーズの分譲を進めてきた。ヴェリテとは、フランス語で「真実・真理」という意味。24年5月のヴェリテ永和駅前を皮切りに、帝塚山万代・山本駅前テラス・洛西口を順次分譲。26年3月からは東急不動産株式会社と共同で「ブランズ・ヴェリテ堺七道」の分譲を開始した。



ブランズ・ヴェリテ堺七道

◆ NANKAI 130th Anniversary



リフォームプラザ泉北店



リフォーム促進で沿線価値向上

この10年は、団塊世代が長年暮らしてきた住宅がリフォームの時期を迎えることとなり、リフォーム市場が活況を帯びてきた時期である。このチャンスに

南海不動産ではリフォーム事業に本格進出。平成19年(2007)9月に体感型シヨールームの「南海リフォームプラザ」の第1号店(泉北店)をオープンし、その後も沿線内外に店舗展開していった。

一方で、昭和40～50年代に開発されたニュータウンでは全国的に高齢化が進み空き家が目立つようになってきた。当社沿線も例外ではない。沿線人口の減少は街としての活気が失われていくが、沿線人口の維持・拡大は沿線価値向上に加え、リフォームなどのビジネスチャンスにもつながる。

こうした状況下において、河内長野市においては、南海リハウスも参画して、国のモデル事業「自然にやさしく子育てに安全・安心なまちづくり」を推進するなど、街の活性化に向けた取組みも展開している。

Ⅲ 流通セグメント

「なんばパークス」が全館グランドオープンし、「なんばエリア」のにぎわい創出の課題は、鮮度の維持・向上と他エリアとの差別化に向かった。エリア内の回遊性を向上させるべく、リニューアルや新たな街づくりが行われた。また、駅ナカや高架下を活用した新規商業空間開発など、新たな事業領域にも進出した。

「なんばパークス」全館グランドオープンからリニューアルへの歩み (H19~27)



山中社長らによるテープカット

平成15年(2003)10月に開業した「なんばパークス」第1期エリアは、初年度に年間約2,122万人のお客さまにご来場いただき、都市開発の先進モデルとして、また大阪の新名所として高く評価されてきた。関西国際空港の第2滑走路の供用開始に向けて、なんばパークス全体計画の完成は、難波地区のゲートシティにふさわしい街づくりの集大成となる。大きな期待が寄せられるなか、19年4月19日、なんばパークス全館がグランドオープンした。

●時間消費型の街づくり

第2期エリアでは、(1)時間消費型の街づくり、(2)幅広い層のお客さまへの対応、(3)1期で不足している機能の充足・解消、という3点を意識した街づくりが行われた。

集客の核として、6階から10階にかけて大阪市内最

大級(11スクリーン・約2,200席)のシネマコンプレックス「なんばパークスシネマ」を展開。席幅70cmのワイドシートを採用し、専用ラウンジを備えた「プレミアムスクリーン」を設置するなど、他のシネコンとの差別化を図った。

また、屋上公園「パークスガーデン」は、3,500m²広くなり、1期・2期合計で1万1,500m²となった。新設した階段状のスペース「ステップガーデン」では定期的に音楽会を開催。お客さまに様々な楽しみを提供する「時間消費型の街」がつけられた。

●都市型高感度ショップが集積

新規出店したテナントは、物販・飲食あわせて125店舗。合計239店舗となり、幅広い層のお客さまのニーズに対応するとともに、大型書店やインテリア関連など新たな機能が加えられた。

8階にチャペルを備えたフレンチレストランや、5階には書籍・カルチャー・雑貨・カフェの複合新業態店、4階には首都圏で人気のインテリア雑貨店などが関西初出店。1階には、世界初の大人も楽しめる都市型ストア「トイザラスセレクト」がオープンした。1~3階の「T-テラス」では、フィットネスジムと岩盤浴が楽しめる施設をはじめ29店舗が出店し「上質な日常」を提供した。

なんばパークスの全館グランドオープンには、オープン前から約5,450人のお客さまが行列をつくり、初日の入場者は約11万3,000人を数えるなど人気を集め、1年間の入場者総数は2,920万人を記録した。

●「なんばパークス」のリニューアル (H22～27)

「衣・食・住」に新たな価値を提供し、都市で暮らす、都市で遊ぶ人々のあらゆるニーズを満たすために、「なんばパークス」では随時リニューアルを実施してきた。

平成22年(2010)3月、第1期オープンから7年目を迎えたなんばパークスは、日本初出店を含む新店、移転・改装店をあわせて63店舗を新たにオープン。洗練された大人の男女に向けた高品質・ハイグレードな商品を充実させた。このリニューアルオープンによって、総店舗数は240店舗から250店舗に拡大した。



第1回リニューアルオープン直後のにぎわい

24年3月には、2回目となる大規模なリニューアルを行った。前回のリニューアルコンセプトを踏襲し、さらに充実させたのに加え、居心地の良い空間・環境を提供することで、男女を問わず「ゆっくり・じっくり」とお買い物を楽しめ、充実感を得ていただける施設づくりに努めた。とりわけ、「なんば」の街としての価値を高めることを目指し、国内、関西、大阪初のショップや「メイドインジャパン」ブランドのラインナップを強化した。

27年3月には、ブランドオープン以来初となる全フロアを対象としたリニューアルを実施。従来から支持さ



3D映像に注目するお客さま

れている高感度のファッション店舗やカフェに加え、キッズプレイゾーンを含む子ども向け店舗や飲食・物販店などを充実させ、全国初・関西初出店を含む新店49、移転25、改装26の計100店舗をオープンした。

「なんばCITY」のリニューアルと再生計画 (H18～23)

「なんばCITY」では、昭和53年(1978)に開業して以来、随時リニューアルを実施し、近年では「なんばパークス」の開業にあわせ、平成15年(2003)に南館をリニューアルするなど、刻々と変化するトレンドに対応すべく施設の活性化に努めてきた。

●「メンズゾーン」の全面リニューアル (H18)

18年9月、なんばCITYでは、本館地下2階の「メンズゾーン」を全面リニューアルし、ゾーン名称を「CITY MEN'S」に変更のうえオープンした。



なんばCITY[CITY MEN'S]

なんばエリアでは、同月に首都圏を中心に展開する「マルイ」が開業。翌年春にはなんばパークス第2期開業が予定されるなど商業集積が進んでいた。なんばCITYには、これを機にターゲット層を明確に打ち出すことで競合する他施設との差別化を図り、新規顧客を獲得するという目的があった。

マルイが10歳代後半～20歳代前半、高島屋が40歳代以上を主なターゲットとするなか、CITY MEN'S

が狙うのは30歳プラスマイナス3歳の大人のオトコを意識する年代と設定。リニューアルコンセプトを鮮度・感度の高いファッション性の追求とした。「CITYブランドの再構築」に向けて、洗練されたスーツスタイルから上質なカジュアルファッションに加え、靴、バッグ、趣味雑貨などを充実させ、「大人のライフスタイル」をトータルに提案。関西初出店7店舗をはじめ、26店舗中11店舗が新規出店となり、従来の店舗構成を大幅に刷新した。

リニューアルにあわせて、同ゾーンのトイレの全面改修を実施。壁や床の配色、素材・照明などにこだわり、「CITY MEN'S」の雰囲気にあわせたスタイリッシュな空間を創出した。

●「なんばCITY再生リニューアル計画」(H21~23)

平成19年(2007)にスタートした「南海ターミナルビル再生計画」の一環として、「なんばCITY再生リニューアル計画」が進められた。基幹動線を整備して回遊性を向上させ、鮮度・感度の高い店舗構成へのリニューアルで売上拡大を図ることが目的だった。

まず第1期工事では、高島屋大阪店新本館計画(増床部分)に隣接する本館1階の一部をゾーンリニューアルし、施設環境の刷新を図るとともにファッション・飲食店舗を導入。21年10月に完成し、新規出店15店舗を含む24店舗をオープンした。

第2期工事は、なんばターミナル全体の活性化を基本に、新しい時代に相応しい都心型SCの再創造を基本コンセプトとした。23年4月、都心で働く女性をター



店舗の充実にあわせて動線も強化

ゲットとした店舗構成に大幅リニューアル。ファッション、雑貨、カフェなど、関西初出店、大阪初出店のショップを含む86店舗が新しくオープンした。

また同リニューアルでは、施設単体の魅力向上にとどまらず、より多くのお客さまに街全体を回遊していただけるよう動線の強化に重点を置き、通路の整備やエスカレーターの位置変更などを行った。この結果、街の賑わいの中心軸が、ガレリアコートから南北基幹動線と高島屋新館に接続する東西動線の結節点まで南下。新設した広場を中心に新たな人の流れを生み出した。なんばCITYは、高島屋大阪店となんばパークスという2大商業施設をつなぐ「なんばエリアの中核施設」となった。

「なんばこめじるし」がオープン(H19)



なんばこめじるし

「なんばパークス」全館グランドオープンの賑わいをエリア全体に波及させるべく、新たな街づくりが行われた。平成19年(2007)6月、なんばパークスに隣接する「なんばpier」の一部を改装し、新飲食ゾーン「なんばこめじるし」がオープンした。その名は、江戸時代に置かれた徳川幕府直轄の米蔵「難波御蔵」に由来する。

「地元の人たちが日常的に使いこなし、愛される路面店が集まる街」をコンセプトとする同ゾーンには、本店移転や2店舗目(支店初出店)など大阪南部を中心に人気を集めている12店舗が集結した。オープンにあわせ、既存飲食ゾーンの内部通路を改装することによ

って、北から南への人の流れを強化・創出。なんばこめじるしが東西の結節点となることで、なんばCITYとなんばパークスとの回遊性を向上させた。

「プラットプラット」がリニューアルオープン (H25)

平成25年(2013)9月、オープンから14年目を迎えていた堺駅前の商業施設「プラットプラット」をリニューアルオープンした。今回のリニューアルでは、メインターゲットである20~30代の若いファミリー層に向けた商品を充実させたほか、利便性の高い立地を生かして通勤客を取り込むべく、ファッション雑貨店舗を誘致。移転・改装あわせて16店舗が新たにオープンした。

カラフルだった外壁は、白を基調としたカラーに変更し、清潔感のあるオシャレな施設に生まれ変わった。館内の案内サインを改善し、外壁にあわせてエレベーターホールの色調も変更。さらにはフロアガイドのラック増設を行うなど、様々な側面からお客さまにご利用いただきやすい環境が整備された。



色の変更で外観のイメージも変化

「ショップ南海住吉」がリニューアルオープン (H20)

当社では、駅周辺の社有地や高架下の有効活用を目的に商業施設「ショップ南海」を展開してきたが、施

設の美装化と活性化に向けて、順次リニューアルを進めていった。

平成20年(2008)3月、「ショップ南海住吉」のリニューアル工事が竣工。“史跡・住吉大社の最寄り駅にふさわしく、門前町としての賑わいと伝統を醸し出す商空間の演出”をコンセプトとして、中央通路を石畳仕様とするとともに、入り口や店舗区画にも木目調の格子などの装飾を施し、参詣路としての雰囲気醸成した。

また、22年7月には、「ショップ南海堺駅南口」がリニューアルオープンした。



参詣路としての雰囲気が漂うショップ南海住吉

天王寺・なんば・梅田に「ekimo」がオープン (H23~26)

平成23年(2011)7月、当社グループ「南海商事」と東急不動産株式会社の共同事業体が大阪市交通局の駅ナカ事業の運営管理予定者に決定。両社の持つノウハウをあわせ、天王寺、なんば、梅田の3駅と周辺エリアの価値向上に貢献し、市民とお客さまが集い、喜ばれ、愛される「駅ナカ商業施設」の運営を目指すことになった。

本格的な開業に先駆け、当社は24年1月、駅ビジネスの再編・強化を目的として、ショップ南海など駅周辺商業賃貸事業を南海商事に、アンスリー運営事業を「南海フードシステム」に承継させることを発表。また、3月にはSCなどでプッシュカート(ワゴン)を使用したミニ



忙しいオフィスワーカーにとって便利な店舗が連なる

ショップ運営や季節に応じた催事の企画・運営などを行う「エイチディ・プランニング・ウエスト」の全株式を取得し、商号を「南海リテールプランニング」に変更。駅ナカ商業施設の運営に向けて、グループ内の体制を整備した。

大阪市営地下鉄の駅ナカ商業施設の名称は「エキモekimo」となり、第1弾の「ekimo天王寺」は、コンビニ「アンズリー」やドラッグストアなど毎日利用できるショップと、新業態や関西初出店のショップなど、計11店舗をバランスよく展開し、25年4月にオープンした。

続いて10月には、御堂筋線なんば駅に関西地下鉄最大規模の駅ナカ商業施設「ekimoなんば」を開業。国内外からの観光客・買い物客が多いなんばの立地にあわせ、関西初出店となる流行発信ショップ「ランキンランキン」や人気キャラクターショップ「しろたんフレンズパーク」など計19店舗をそろえた。

そして26年4月には、3つめとなる駅ナカ商業施設「ekimo梅田」を開業した。同施設は御堂筋線梅田駅の中改札と南改札の間に立地。西日本最大のターミナルを利用される多彩なお客さまに向けて、イタリア発のファッションブランド「カルツェドニア」日本1号店やクリームパンで人気の「八天堂」など、便利さと楽しさを兼ね備えた14店舗をそろえた。

ekimoでは、便利さだけでなく駅ごとの個性に応じた プラスα $+a$ の提供を常に心掛けている。

なんばEKIKANプロジェクト始動 (H26～)

中期経営計画「凜進130計画」の基本方針である「不動産・流通事業の拡大」と「なんばのまちづくり推進」を踏まえて、難波～今宮戎駅間高架下の一部において「なんばEKIKANプロジェクト」と名付けた新規商業開発に着手した。

平成26年(2014)4月、その第1期開発として築76年の鉄道高架を支える美しいアーチ状の梁などを利用した新たな商業空間が誕生。「人と人をつなぐ」ことをテーマにお客さま同士の交流を生む店舗を誘致し、老若男女問わず楽しめるDIYに関するワークショップなどが開催できる工房を店舗に併設した「DIYファクトリーオオサカ」ほか2店舗が順次営業を開始した。

第1期エリアに続き、第2期エリアにおいても「人と人をつなぐ」をテーマとし、お客さま同士の交流を生む店舗を誘致した結果、27年3月、店内にスケートボード滑



難波駅の南側に新たな「まち」が誕生した

走施設を併設したスノーボード、サーフィン、スケートボード店「Lead osaka」ほか2店舗をオープンさせた。第2期エリアの一部では、高架の架道橋部分が高架下でありながら日光が差し込むことに着目し、歴史ある高架橋の雰囲気を生かした共用空間を整備した。

「N.KLASS三国ヶ丘」がオープン(H26)



個性的な店舗が並ぶ N.KLASS 三国ヶ丘

平成26年(2014)5月29日、高野線三国ヶ丘駅に、南海(NANKAI)がある日常を、素敵に(NICE)暮らす(KURASU)ことと、ひとつ上のクラス(CLASS)を目指す駅ナカ商業施設「N.KLASS 三国ヶ丘」がオープンした。

同施設では、昼は立ち食いそば、夜は人気のお取り寄せ銘品が味わえる居酒屋に変身する「南海そば／駅中酒場スタンドミクニ」など8店舗が4月に先行開業。グランドオープンでは、イベントスペース「KLASSマルシェ」や、南海エフディサービスが人気塩ラーメン店「龍

旗信」とコラボレーションした「駅ナカからめんズ・スール」、スーパーマーケット「成城石井」など4店舗が加わった。

これによって「三国ヶ丘駅改良事業」はすべて完了し、リフレッシュした橋上駅舎と屋上広場「みくにん広場」とあわせて、三国ヶ丘に魅力あふれる名物施設が誕生した。

泉ヶ丘駅前商業施設を取得(H26)

平成26年8月1日、泉北高速鉄道泉ヶ丘駅前の商業施設(泉ヶ丘センタービル、南専門店街ビル)および駐車場ビル3棟を取得し、同日から当社が運営を開始した。泉ヶ丘駅前地域は、泉北ニュータウンの中核的地域として位置付けられており、今後の泉北ニュータウン活性化の推進役として大きく期待されている。当社はその一役を担うべく、取得物件のリニューアルおよび耐震補強工事によって利便性向上と安全・安心の徹底を図るとともに、周辺事業者や行政との連携を深め、エリアの活性化活動にも取り組んでいく。

◆ NANKAI 130th Anniversary

10年
ひと昔

難波駅南側エリアに 新たな「まち」を創出

流通営業本部 企画部 座古 達郎

平成26年(2014)に第1期、平成27年に第2期オープンを迎えた「なんばEKIKANプロジェクト」において、テナント誘致業務を担当しました。

プロジェクトを進めている難波駅南側エリアでは、なんばパークスの開業など周辺の再開発により、若い層を中心に都市生活者の流入が起きていることに着目し、高架下から新たな「まち」を創出することを目的として開発計画を策定しました。

お客さま同士の繋がりを生み出す趣味性の高い店舗の誘致や、竣工から約77年の時を経た高架橋の造形を魅せる店舗づくりなど、お客さまにわざわざ来ていただく仕



高架構造物の歴史を体感できる施設

掛けを行いました。

高架下が明るくなったことで、周辺に店ができ始めたことから、エリアの可能性を感じています。平成28年春には第3期開業を予定しており、設計施工担当とともに今後もプロジェクトの推進に取り組んでいきます。

Ⅳ レジャー・サービス、建設、その他セグメント

「ボートピア梅田」をオープンし、みさき公園では開園50周年を迎えたのを機に、様々な活性化策が打ち出された。また、将来の収益源の確立を目指して葬祭事業やシニアビジネス、ドライブインの運営、「指定管理者制度」への参入など新規事業に積極的に進出。グループ力を強化すべくM&Aも推進した。

葬儀会館「ティア」開業(H18~)

当社では、中期経営計画「進化123計画」において基本目標のひとつに「市場変化を先取りする新たな事業展開」を掲げ、将来の収益源となる新規事業への参入を目指してきた。様々な事業が検討されるなか、当社の「信用力」を生かし高齢化が進む地域社会に貢献できる事業として、葬祭事業（葬儀会館の運営）への進出が決定した。

平成18年（2006）3月、葬儀ノウハウを持つ株式会社ティアと業務提携し、葬祭会館の第1号店「ティア橋本」を建設。当社グループ「グリーフサポート」（現・南海グリーフサポート）の運営でスタートし、続いて翌19年5月には、千代田工場敷地内に「ティア千代田」をオープンした。そうして、20年に策定された中期経営計画「堅進126計画」においても「葬祭ビジネス」の拡大方針が示され、葬儀会館「ティア」のオープンはさらに加速することになった。

21年4月、南海本線初となる「ティア泉大津」、6月に大ホール2つと小ホール1つを完備した「ティア貝塚」、22年6月に河内エリア初の「ティア富田林」、10月に当社線高架下スペースに「ティア住之江」をオープンした。

翌23年3月には、小ホールや会食ホール、多目的室など多様な式場を完備した「ティア藤井寺」をオープン。5月には環境に配慮した会館「ティア美原」、10月には家族葬向け施設を充実させた「ティア大野芝」、12月には「ティア大阪狭山」をオープンした。

24年2月には、岸和田駅から徒歩1分の場所に当社

グループ初の3階建て会館「ティア岸和田」をオープン。また、4月には堺市内で3つ目の「ティア浜寺」をオープン。ティア美原、ティア大野芝と連携し、堺エリアにおける葬儀のニーズにお応えすることにした。

24年6月には13号店となる「ティア枚方」をオープン。1階が20人収容の小ホール、2階が120人収容の大ホールや36人収容の会食室、宿泊が可能な和洋室の親族控え室などで構成した。

「ティア」は、明確な葬儀価格とお客さまに心の満足を提供する「便利・安心・感動サービス」をモットーに、地域になくてはならない存在となることを目指している。



葬祭会館の第1号店「ティア橋本」

「ボートピア梅田」がオープン(H19)

平成19年（2007）3月、「ボートレースすみのえ」の場外舟券発売場「ボートピア梅田」が大阪市北区にオープンした。ボートピア梅田は大阪府内で初めての場外舟券発売場で、当社グループ「住之江興業」が業務を受託。地上10階・地下2階建てで、2～5階に一般席、



ポートピア梅田

6～9階に有料席を設けた。8階には西日本のポートピア初となる在席投票システムを80台導入し、座席に座ったまま投票やレースに関する情報を確認することができるようになった。

運営は順調に推移し、ボートレース事業の活性化を図り、「お客さま最優先」を実現するため、施設とサービスの充実をはじめ様々な取組みを行っている。

みさき公園開園50周年からの 新たな取組み (H19～21)

平成19年(2007)開園50周年を迎えたみさき公園では、記念事業をはじめ様々なイベントやライブが繰り広げられた。3月からは「記念スタンプラリー」や「よしもと爆笑ライブ」を開催し、記念DVDや公式ガイドブックも発行。ゴールデンウィークには、みさき公園駅へ「臨時特急ラポート」が運行した。

4月には、カンガルーの飼育スペースを全面改装するとともに、旧ゾウ舎を転用して「メモリアル資料館」としてオープン。当園で亡くなったインドゾウ「イズミ」の骨格標本やゾウに関する資料を展示した「ゾウ記念資料ルーム」や「企画展示ルーム」、ゾウやアカカンガルーなどの形の体験型遊具のある「プレイゾーン」を設け、来園者が楽しみながら「動物が持つ本来の能力」を学ぶ機会を提供する施設とした。

また、20年3月からは「アトラクションカード」を導入した。1枚のカードにチャージしたアトラクションポイント「Mipo^{ミポ}」で、コイン式を除くすべてのアトラクションに利用できるようになり、お客さまの利便性を向上させた。



「メモリアル資料館」保育園児らによるテープカットセレモニー

50周年記念事業にあたっては、入園ゲートのリニューアルと、来園者の人気の的である「イルカショー」をさらに充実・強化すべく「新イルカ館」の新設が行われた。両施設は20年12月に完成したが、オープン前に旧イルカ館のショープールから新プールへ、イルカ7頭を引越しさせる必要があった。1月中旬、旧プールでトレーナーがイルカを1頭ずつ担架に乗せ、クレーンでつり上げて新プールへと、優しく丁寧に移送が行われた。

また、新イルカ館のオープンにあたっては、ネーミングライツ(命名権)制度を導入。公募の結果、スポンサーを株式会社伊藤園にお願いすることになり、同館の愛称は「伊藤園シャイニースタジアム」に決定した。

21年3月1日、新イルカ館・伊藤園シャイニースタジアムがオープンし、リフレッシュした入園ゲートに大勢のお



イルカショー

皆さまをお迎えした(24年4月からは株式会社ユーポスとネーミングライツ契約し「ユーポス シャイニースタジアム」に改称)。

26年には、子どもたちに人気の鉄道の仕事について楽しく遊びながら「学ぶ」「体験する」空間を提供すべく、園内に鉄道体験施設を建設した。施設名称は公募で「わくわく電車らんど」に決定。子どもたちが心躍らせるような楽しい施設にしたいという当社の思いと合致したネーミングとなった。施設内には、実際に使用されていた10000系特急サザンと7000系の旧塗装・現



わくわく電車らんど

塗装の2種類を先頭から約5mでカットして展示。運転台などでの写真撮影や車掌体験などを楽しめるようにした。また、特急ラピートの実物大模型を展示し、内部に運転シミュレーターを設置することで運転士体験を楽しめるようにした。さらに、懐かしのヘッドマークなど当社が所有している鉄道部品などを展示するとともに、交通ルールの教育・啓発活動なども行えるよう、本物の踏切施設も併設。9月のオープン以来、期待どおりの人気を集めている。

みさき公園では、その後も次々と新企画やイベントを打ち出し、一年を通じて賑わいを演出。ファミリーのリピーター増加と新たな来園者の開拓がますます期待されている。

新規事業への進出

当社グループ(当社、南海商事、熊野交通)が熊野
なかへち ちかつゆ
古道中辺路の中心部・近露(和歌山県田辺市)で計画



古道歩きの里 ちかつゆ

を進めてきた大型ドライブイン「古道歩きの里 ちかつゆ」が完成し、平成22年(2010)3月にオープンした。

「ちかつゆ」は中期経営計画「堅進126計画」に掲げられた基本方針のひとつ「沿線活性化の推進」に向け「南紀エリアの観光関連ビジネスの強化」を目的として整備したもの。お食事や地元の特産品販売を主とすることから流通セグメントに区分されるが、マイカーや観光バスをご利用のお客さまに熊野古道歩きを体験していただける新たな観光拠点としての役割を担っている。

また、シニアビジネスへの本格参入として「南海ライ

フリーション」を設立。同社が事業主体となり、四国ライフケア(高知県)と業務提携して、25年7月、サービス付き高齢者向け住宅の登録を受け、居室数90室からなる有料老人ホーム「南海ライフフリーションあびこ道」を開業した。同施設は、24時間介護職員が常駐、日中時間帯には看護師も常駐し「安全・安心」なサービスを提供。食事も、和洋の朝食に加えて、平日の昼食は選択食を採用するなど、入居者に喜んでいただけるホーム運営を行っている。さらには、介護事業と障がい者自立支援事業を両立させるべく「就労継続支援A型事業所」を併設。老人ホーム内の洗濯・清掃業務を障がい者が担う新たな方式を採用している。



南海ライフフリーションあびこ道

◆ NANKAI 130th Anniversary

10年
ひと昔

鉄道会社の遊園地にふさわしい 魅力ある施設に

事業部 中山 篤

車掌体験などができる「南海電車まつり」が毎年盛況であることや、遊具を導入するよりも会社の資産である鉄道車両を活用するほうがコストを抑えられることなどから、みさき公園に子ども向け鉄道体験施設を設置する運びとなりました。

廃車予定の10000系サザンと7000系を展示用に加工したのですが、遊具ではない実物の車両ですので、子どもたちが安全に遊ぶよう注意を払わなければなりません。同様の施設を運営する他社のアドバイスを参考にし、千代田工場へ何度も足を運んで検討を重ねました。

一方、50000系ラビートは原寸大の模型を作ることに。

柵などでお客さまの
安全を確保



実物大の車両模型を作ったことのある模型業者がなくて困っていたところ、九州の造船業者が精巧な大型模型を作っていることを聞き、依頼することになりました。ラビートが中途半端な出来ではお客さまの期待に応えられないので、実車の図面や塗料などを取り寄せて、本物そっくりの外観に仕上げました。

このほかの展示物などを含め、鉄道営業本部の皆さんに協力いただいたおかげで、当園に新しい魅力を生み出すことができたものと大変感謝しています。

「指定管理者制度」に新たに参入 (H18～)

「指定管理者制度」とは、美術館や体育館など、地方自治体の施設を管理・運営する担い手を民間企業に広げる制度。当社では、当社の持つブランド力やこれまでのノウハウを生かせるビジネスチャンスと捉え、新たに導入された「指定管理者制度」の分野に参入した。

●「大阪府立体育会館」「臨海スポーツセンター」「漕艇センター」の運営 (H18～)



一年中イベントが絶えない大阪府立体育会館

まず、グループ会社「南海ビルサービス」とともに大阪府から指定を受け、大阪府立体育会館、臨海スポーツセンター、漕艇センターの指定管理者となり、平成18年(2006)4月から運営をスタートした。

とりわけ大阪府立体育会館は、毎年春に行われる「大相撲3月場所」をはじめ「高校総体」、「世界バレー」、「サーカス」などの大きなイベントが行われる施設。府民をはじめ、多くのお客さまにご利用いただく施設の運営を、公的機関に代って行う責任は大きかったが、これまでのノウハウを活用し「お客さまとともに」の精神を实践することで、南海ブランドにふさわしい運営を行っている。

●「とんぼりリバーウォーク」の管理運営 (H24～)

24年1月には、大阪市建設局が公募した道頓堀川遊歩道「とんぼりリバーウォーク」の管理運営事業者に選ばれた。期間は同年4月1日から27年3月31日までの3年間。主な受託業務内容は「賑わいの創出に関する業務」と「維持管理業務(清掃・警備)」だった。

まず手始めに、とんぼりリバーウォークをブラっとすることを「とんブラ」と称し、新たな楽しみ方として提案。そして24年5月には、公募していたロゴマークを決定し、発表した。応募総数58

作品から選ばれたロゴマークは、堺筋から湊町までのつながりや楽しさ、賑やかさを表現したデザインになっている。



「とんブラ」ロゴマーク

同年6月には、オープニングセレモニー「とんブラ2012」を開催。山中諄会長兼CEOら参加者約130人が「100mテープカット」を行った後、パレード船に分乗して道頓堀川を周遊しながら「とんブラ」をPRした。

その後も、周辺を散策している人々に楽しんでいただける様々なイベントを誘致・開催するなど、憩いの場として活用。道頓堀エリアに賑わいを創出することで、なんばCITYやなんばパークス、周辺観光地などとの回遊性を持たせるなど、大阪ミナミ全体を面と捉え、さらなる活性化につなげていった。なお、管理運営業務は30年3月31日までの受託が決定している。



オープニングセレモニー



とんぼりリバーウォークの賑わい

グループ力の強化を目指してM&Aなどを推進(H25~)

平成23年度に策定された中期経営計画「凜進130計画」の基本方針には「不動産・流通事業の拡大」、「新たな事業領域への進出」が掲げられている。当社グループでは、様々な事業分野において、事業の拡大などを目指した積極的なM&Aが実施された。

「南海国際旅行」は、平成25年(2013)6月「株式会社日本エコプランニングサービス」の発行済株式のすべてを取得し、子会社化。エコツアー(砂漠への植林ほか)やボランティアツアー(孤児院訪問ほか)の草分け的な存在である同社と連携することで、SIT(Special Interest Tour)と呼ばれるテーマ性の高い旅行分野の強化と拡大を見込んだ。

「南海辰村建設」は、京都を拠点に総合電気設備分野において数多くの実績を持つ専門工事会社「株

式会社京阪電気商会」を子会社化した。同社が有する電気設備分野に特有の積算監理ノウハウを、自社の電気工事の原価管理に活かして原価削減を図るほか、同社の営業基盤を活用し、京都を中心に外部顧客網の拡大を図った。

「南海ビルサービス」では、18年10月に首都圏でのビルメンテナンス事業の拠点づくりを目的として、子会社の「南海建物サービス」を合併し、東京支店の本格営業を開始していたが、さらに26年2月には「株式会社クラカタ商事」の発行済株式のすべてを取得し、子会社化した。首都圏・福岡・壱岐を中心に清掃などのビルメンテナンス事業を行う同社の事業を継承することで、営業基盤を強化し、設備管理や改修工事など事業のさらなる拡大を目指した。

また19年4月、新たに設立した「株式会社南海大阪ゴルフクラブ」が、「大阪ゴルフクラブ」(岬町)の経営の移管を受けた。